

高齢者理解をめざした中学校家庭科の授業実践研究

吉岡 良江¹⁾・吉本 敏子²⁾・林 未和子³⁾

本研究は、中学校技術・家庭科、家庭分野の「B 家族と家庭生活」の指導において、高齢者理解をめざした2回の交流会を取り入れ、各体験後の感想から、生徒の内面にどのような変化がみられるかを検討したものである。

具体的には、地元の漁協女性部の方にお越し頂き、郷土料理を教えて頂いた1学期末に開催した交流会と、同じく漁協女性部の方にお越し頂き、地元産の梨を用いたお菓子作りと会食の場を設けた2学期末開催の交流会である。各体験後に自由記述式の感想用紙を配布し、記述後回収した。

そこに記された文言を分析した結果、交流会を重ねる毎の意識レベルの深まりは認められなかったが、いずれの体験からも高齢者理解の深まりは認められた。また、交流会前には存在した高齢者に対するマイナスイメージが交流会後にはなくなったということ、祖父母等高齢者と同居している生徒と同居していない生徒とに区分した場合、高齢者との同居生活を送っている生徒よりも別居生活を送っている生徒の方が、高齢者のより内面的な部分に注目し、それをプラスイメージで捉える傾向が強いということが明らかとなった。

キーワード：中学校家庭科・高齢者理解・内面的な学び

I はじめに（研究の目的）

中学校家庭科「家族と家庭生活」の指導においては、自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えさせることをねらいの一つに据え、そこに実践的・体験的な学習活動や問題解決的な学習を取り入れることで、指導の充実をはかるものとして設定されている。

このような状況の中で、筆者は、学びの方向性を「生徒自らが自分の生活を見つめ直し、そこからこれからの人生をより自分らしく、主体性のあるものにする」とし、自己と向き合う場・自己の考えを深める場として、自分史作りやディスカッション、様々な立場にある方々による講演会等の体験活動を取り入れてきた¹⁾。

その結果、視聴覚教材等を用いた間接的体験よりも、講師の方の話を直接聞くといった直接的体験に、より高い学習効果が認められることが明らかとなっている²⁾。

そこで、本研究においては、生徒自らが主体的に他者と触れ合う活動（主体的直接体験）を設けたいと考え、地域の高齢者との交流会を計画した。

本研究は、その一連の実践を報告すると共に、交流会前後の生徒の感想を分析することによって、交流会における高齢者理解の学習効果を図ることを目的とする。

II 研究の概要

1 研究方法

(1) 高齢者理解のレベルの設計

稲谷は、高齢者理解に関して、加齢に伴うマイナス面として、老眼や老人性難聴等身体・生理機能の低下及び、感覚・運動機能の低下を挙げている。またその一方で、プラス面として、環境に対する適応能力、即ち「目的に合うように行動し、合理的に考え、周りの環境に効果的に働きかけて、問題を解決させていく能力」や、知恵を挙げている³⁾。

これを基に、本研究においては、高齢者理解のためのレベルを次のよう設定した。

表1 高齢者理解のためのレベル

レベル	レベルを象徴するキーワード	外面的 内面的	イメージ
1	イメージ	外面的	+
			-
		内面的	+
			-
2	知識	外面的	+
			-
		内面的	+
			-
3	理解	外面的	+
			-
		内面的	+
			-
4	自己認識への反映		

レベル1は、実際に高齢者と触れ合う場をもたない。これまでの経験を基に高齢者をイメージしたものである。

1) 津市立南郊中学校
2) 三重大学教育学部家政教育講座
3) 三重大学教育学部家政教育講座

レベル2は、実際に高齢者と関わる中でわかることである。直感として感じ取るものや、高齢者と関わる中で、高齢者とはこのようなものであると認識するもの等が存在する。主観的且つ概念的な理解である。

レベル3は、レベル2をより深化させたもので、レベル2で得た知識に生徒自らの自己解釈が伴う場合とする。

レベル1からレベル3は、見た目のイメージ等を外面的、物事の考え方や感じ方等に関するものを内面的とし、それぞれプラスイメージで捉えられるものとマイナスイメージで捉えられるものとに区別する。

レベル4は高齢者の様々な姿から獲得した知識・理解を基に、それを生徒自らが実生活に結び付けて考えられるものである。本実践は、高齢者を理解するところまでをめざすものではなく、生徒自身が高齢者を理解した上で、それを実践に繋げることができるようになるところまでをめざすものである。

(2) 交流会における高齢者の理解レベルの分析

まず交流会前（平成19年5月）、第1回交流会（平成19年7月6日）、第2回交流会（平成19年12月14日）の3回に渡る、聞き取り及び自由記述式の感想から、高齢者理解に繋がると思われる文言を抜き出す。

次にそれぞれの文言を高齢者の理解レベルに分類する。そしてそこに各交流会毎の変化が見出せるものかどうかを分析する。また、高齢者と同居生活を送る生徒と別居生活を送る生徒との比較という観点から分析を試みることにする。

2 研究の対象

津市立K中学校第3年生60名を対象とする。男女の内訳は、男子22名女子38名であり、2クラスからなる学年集団である。

このうち、祖父母等高齢者との同居による生活を送っている生徒は18名、別居による生活を送っている生徒は42名である。

3 体験の概要

年間を通して2回の交流会を設定した。各体験の概要は次の通りである。

(1) 第1回交流会

第1回目の交流会は、平成19年7月6日に実施した。地域の漁協女性部との交流事業とし、8名の方にお越し頂いた。いずれも町内在住の60代から70代にかけての高齢期に属す世代の女性である。

地域の魚介類を用いた郷土料理を教えて頂くという趣旨のもので、キスのフライとアサリご飯を教えて頂いた。クラス別に時間を設け、男女混合の5人から6人で構成

される生活班毎に分かれて、指導を受けた。魚のさばき方からフライの揚げ方、盛りつけまで指導を受けた後、女性部の方と共に試食を行った。1時間での実習のため、下ごしらえ等前もって準備して頂いたものもある。

(2) 第2回交流会

第2回目の交流会は、平成19年12月14日に実施した。第1回目と同様地元漁協の女性部の方6名にお越し頂いた。

第1回目の交流会のお礼として、また卒業前の記念行事としての意味合いも込め、生徒自らが考えた地元の特産物である梨を用いたお菓子のレシピの中から、話し合いで決まった12種類のお菓子を、生徒がリードする形で、女性部の方と共に調理し、会食をするというスタイルのものとした。

本交流会においては、クラスの枠を超えて、学年全体を男女混合の12班に分けた。男女の比率も各班によって、まちまちである。

スコーンの様に時間内に下ごしらえから試食までできる班もあれば、ゼリーやロールケーキの様に前日に下ごしらえをし、当日は盛りつけと試食が主となる班もあった。

III 分析

1 交流会を重ねる毎の学習効果

第1回交流会は高齢者の方から学ぶ地域の食材を用いた調理実習であり、第2回交流会は、第1回目のお礼の意味も込めて、生徒自らが企画した地域の特産物を用い

表2 高齢者と同居生徒における交流会前の調査結果

レベル	レベルを象徴するキーワード	視点場面	イメージ	人数(人)	割合(%)
1	イメージ	外面的	+	0	0
			-	11	61
		内面的	+	3	17
			-	3	17
2	知識	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
3	理解	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
4	自己認識への反映			0	0

たお菓子作りの場であった。生徒らにとって調理実習は楽しい取り組みの一つであり、且つ地域の高齢者の方をお招きするという初の試みであった。交流会前と2回の

交流会時に行った調査の結果を基にして、高齢者との同居別居の別なく記述数の最も多かったレベルに注目した。その結果、表14より交流会前は、レベル1（イメージ）が29人、第1回交流会がレベル2（知識）22人、第2回交流会が同じくレベル2（知識）41人という結果となり、回を重ねる毎の意識レベルの深化は認められないことが明らかとなった。しかし、交流会前にはレベル1（イメージ）でしか語られなかったものが、いずれの交流会時もレベル2（知識）及びレベル3（理解）にまで深まっていることもまた明らかとなった。

さらに各レベル毎の記述数に注目すると、レベル2（知識）の項は1回目（35人）から2回目（55人）へと、2回目の交流の方が明らかに増加している。より内面的

表3 表2に関する具体的な記述例

レベル	視点場面	イメージ	具体的な記述例
1	外面的	+	
		-	<ul style="list-style-type: none"> 杖を持っていたりする 身体の自由が効きにくくなっている 体が弱い
	内面的	+	<ul style="list-style-type: none"> 支えてくれる人 自分の知らないことを知っている 優しい
		-	<ul style="list-style-type: none"> 支えなければいけない人 いたわるべき存在

表4 高齢者と別居生徒における交流会前の調査結果

レベル	レベルを象徴するキーワード	視点場面	イメージ	人数(人)	割合(%)
1	イメージ	外面的	+	1	2
			-	18	43
		内面的	+	11	26
			-	1	2
2	知識	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
3	理解	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
4	自己認識への反映			0	0

表5 表4に関する具体的な記述例

レベル	視点場面	イメージ	具体的な記述例
1	外面的	+	自由（好きなことができる）
		-	<ul style="list-style-type: none"> 体の不自由な人 命が短い 人にしてもらわないとできない 年金などお金に困っている
	内面的	+	<ul style="list-style-type: none"> たくさんさんの知識をおさめている 人生経験が豊富
		-	寂しい

表6 高齢者と同居生徒における第1回交流時の調査結果

レベル	レベルを象徴するキーワード	視点場面	イメージ	人数(人)	割合(%)
1	イメージ	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
2	知識	外面的	+	9	50
			-	0	0
		内面的	+	3	17
			-	0	0
3	理解	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	1	6
			-	0	0
4	自己認識への反映			0	0

表7 表6に関する具体的な記述例

レベル	視点場面	イメージ	具体的な記述例
2	外面的	+	<ul style="list-style-type: none"> 魚のさばき方のコツを知っている 笑いが絶えない とても元気いっぱい
		-	
	内面的	+	とても優しい・親切
		-	
3	外面的	+	
		-	
	内面的	+	<ul style="list-style-type: none"> 昔は物を大切にしていたからこういったお恵もつくのだな 私たちとは違う元気さ
		-	

な部分に注目する傾向が高まったことから、レベル4（自己認識への反映）にまでは達していないものの、それぞれの交流会の効果は認められると言えよう。

2 高齢者との同居生徒と別居生徒の比較

交流会前の調査では、同居生徒・別居生徒共にレベル1（イメージ）において、マイナスイメージで捉える傾

向が強いものの、別居生徒においては内面的な部分をプラスイメージで捉える向きも認められる。

次に2回に渡る交流会においては、同居生徒・別居生徒共に、レベル2（知識）からレベル3（理解）へと深まりが認められる。いずれもマイナスイメージで捉えるコ

表8 高齢者と別居生徒における第1回交流時の調査結果

レベル	レベルを象徴するキーワード	視点場面	イメージ	人数(人)	割合(%)
1	イメージ	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
2	知識	外面的	+	13	31
			-	0	0
		内面的	+	10	24
			-	0	0
3	理解	外面的	+	8	19
			-	0	0
		内面的	+	5	12
			-	0	0
4	自己認識への反映			0	0

表9 表8に関する具体的な記述例

レベル	視点場面	イメージ	具体的な記述例
2	外面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •すごく元気 •よく色々な事を知っている •年を感じさせない
		-	
	内面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •とても優しい •おいしくできたのは優しく教えてくれたおかげだ
		-	
3	外面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •おもしろく愉快な人ばかりですが香良洲の人だなあ •長く生きていることで知識が全然違う
		-	
	内面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •体が不自由であり外に出ない存在から元気で明るく優しい存在へと変わった •香良洲の人達だし、小さい頃から知っているからすごく親しみやすい
		-	

表10 高齢者と同居生徒における第2回交流時の調査結果

レベル	レベルを象徴するキーワード	視点場面	イメージ	人数(人)	割合(%)
1	イメージ	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
2	知識	外面的	+	4	22
			-	0	0
		内面的	+	12	67
			-	0	0
3	理解	外面的	+	1	6
			-	0	0
		内面的	+	1	6
			-	0	0
4	自己認識への反映			0	0

表11 表10に関する具体的な記述例

レベル	視点場面	イメージ	具体的な記述例
2	外面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •適切なアドバイスを出してくれた •とても明るく元気だ •とてもパワフルだ
		-	
	内面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •何度もおいしいと言ってくれた(気遣いとして) •(失敗だったのに)とてもおいしいと言って笑顔で嫌な顔一つせずに食べてくれた
		-	
3	外面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •色々な経験を積んでいるからか何事も私たちよりも素早かった おばあさんだからといって老化して何も出来ないわけではないようだ
		-	
	内面的	+	<ul style="list-style-type: none"> •最初はなかなかうまくしゃべることができずどう接したらよいかわからなかったがおばあさんから話してくれて楽しく会話ができた
		-	

表 12 高齢者と別居生徒における第 2 回交流時の調査結果

レベル	レベルを象徴するキーワード	視点場面	イメージ	人数(人)	割合(%)
1	イメージ	外面的	+	0	0
			-	0	0
		内面的	+	0	0
			-	0	0
2	知識	外面的	+	10	24
			-	0	0
		内面的	+	29	69
			-	0	0
3	理解	外面的	+	4	10
			-	0	0
		内面的	+	3	7
			-	0	0
4	自己認識への反映			0	0

表 13 表 12 に関する具体的な記述例

レベル	視点場面	イメージ	具体的な記述例
2	外面的	+	・話しやすい ・とても元気な方達ばかりだった
		-	
	内面的	+	・すごくおいしいと何度も褒めてくれた
		-	
3	外面的	+	・ロールケーキがカチカチの時炙ったらいい等アドバイスをくれた さすが長く生きているだけ知っていることが多いなと思った
		-	
	内面的	+	・盛りつけをしてもらった時少しの説明なのにすぐ理解してもらえ、理解力があると思った 今回の目的は前回のお礼ということだが本当に私はお礼ができたのだろうか 逆に漁協の方の優しさや温かさをもらった気がした
		-	

メントは存在しない。別居生徒はいずれの体験においても、レベル 2・レベル 3 のプラスイメージに該当するコメントがみられる。同居生徒と別居生徒それぞれの人数に偏りがあるため、人数だけで比較できるものではないが同居生徒よりも別居生徒において高齢者をよりよく理解しようと努める傾向にあると言えるのではないだろうか。

表 14 記述人数に視点をあてた各調査の結果 (人)

レベル	キーワード	視点場面	イメージ	交流前			第 1 回交流時			第 2 回交流時		
				同居	別居	合計	同居	別居	合計	同居	別居	合計
1	イメージ	外面的	+	0	1	1	0	0	0	0	0	0
			-	11	18	29	0	0	0	0	0	0
		内面的	+	3	11	14	0	0	0	0	0	0
			-	3	1	4	0	0	0	0	0	0
2	知識	外面的	+	0	0	0	9	13	22	4	10	14
			-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		内面的	+	0	0	0	3	10	13	12	29	41
			-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	理解	外面的	+	0	0	0	0	8	8	1	4	5
			-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		内面的	+	0	0	0	1	5	6	1	3	4
			-	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注) 同居→高齢者と同居の生徒、別居→高齢者と別居の生徒

IV まとめと今後の課題

本研究を通して、高齢者理解をめざした 2 回の交流会から、回を重ねる毎の意識レベルの深まりは、必ずしも認められるものではないものの、交流会の効果は、認められるということが明らかになった。また、高齢者と同居生活を送る生徒と別居生活を送る生徒との比較から、別居生活を送る生徒の方が、高齢者に対し、より好意的に且つ深い理解の度合いを示すということが明らかとなった。交流会前に存在した高齢者に対するマイナスイメージが交流会を経てなくなったということからも、今後さらに様々な立場にある高齢者の方との交流の場を設定する等の改善策を取り入れることで、深まりのある高齢者理解のための実践が可能になると思われる。本年度計画していたものの、実現には至らなかった地域の老人福祉施設への訪問・交流等から取り入れていきたい。

中学校家庭科での指導においては、「これからの自分の生き方を考えさせる」学習が重要視される今日、高齢者理解は生徒がこれからの自分の生活を考える上においても非常に重要な学習領域である。

真の高齢者理解のための有効的な体験の在り方について、今後さらに検討していきたい。

参考文献

- 1) 吉岡良江著「自分を見つめよう 自分史作りを中核に据えた実践」日本教職員組合 第 55 次教育研究全国集会報告書 第 8 分科会 家庭科教育 2007
- 2) 吉岡良江 吉本敏子 林未和子著「体験活動を通してのちと向き合う家庭科の授業実践研究 — 4 事例

の検討を基にして一」三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第28号 2008

3) 官原英種監修 稲谷ふみ枝著「高齢者理解の臨床心理学」ナカニシヤ出版 2003.3

4) 渋谷昌三 小野寺敦子著「手にとるように心理学用語がわかる本」かんき出版 2002.5

5) 土田陽子(角間陽子)著「世代間交流によるエイジング学習を導入した家庭科教育プログラムの開発研究」2008

6) 河野公子 渡邊康夫編著「新中学校教育課程講座〈技術・家庭〉」ぎょうせい 2000.2